

# 平成15年度試験研究成果書

区分	普及	題名	「もち美人」の期待生育量一部改定と栄養診断基準				
[要約] 水稻中生もち品種「もち美人」について、期待生育量を一部改定した。また、目標籾数25~30千粒を確保するための栄養診断基準を策定した。							
キーワード	もち美人		期待生育量	栄養診断基準	農産部		水田作研究室

## 1 背景とねらい

水稻糯品種「もち美人」について、これまで期待生育量、栽培法について明らかにしたが、品質・収量の安定確保の面から検討を重ねた結果、期待生育量の一部改定を提案する。あわせて、追肥の要否判定を行うための栄養診断基準について策定した。

## 2 成果の内容

### (1) 期待生育量の一部改定

	収量水準 Kg/10a	穂数 本/m <sup>2</sup>	一穂籾数 粒	m <sup>2</sup> 籾数 千粒	玄米千粒重 (1.9mm) g	登熟歩合 %	稈長 cm
新指標	500~580	350~410	67~76	25~30	25	85~90	85以下
旧指標	500~560	320~360	67~76	23~27	25	85~90	85以下

(2) 栄養診断基準 m<sup>2</sup>籾数25~30千粒を確保するための栄養診断基準を下記の通りとする。

### ア 栄養診断基準値

項目	診断時期	分けつ期 (6月下旬)	幼穂形成期	減数分裂期
窒素吸収量 (g/m <sup>2</sup> )		2.3~3.9	5.0~8.0	6.5~8.0
地上部乾物重 (g/m <sup>2</sup> )		90~130	300~390	450~620
稲体窒素濃度 (%)		2.6~3.0	1.8~2.2	1.3~1.6

### イ 幼穂形成期の栄養診断値による追肥判定の目安

基準値未満の場合	基準値以内の場合	基準値以上の場合
籾数確保のため幼穂形成期追肥を実施する。減数分裂期の追肥は実施しない。	減数分裂期追肥を基本とする。	減数分裂期に再度栄養診断を実施し、基準値以内であれば追肥を実施する。減数分裂期の基準を超える場合は追肥を控える。

### ウ 幼穂形成期及び減数分裂期における稲体窒素濃度に対応する葉色及び簡易栄養診断値

時期	測定法	葉色対応値	簡易栄養診断値 草丈(cm) × 茎数(本/m <sup>2</sup> ) × SPAD値
幼穂形成期	葉緑素計 (SPAD)	41~45	1.5~2.3 × 10 <sup>6</sup>
減数分裂期	葉緑素計 (SPAD)	39~42	1.4~2.4 × 10 <sup>6</sup>

## 3 成果活用上の留意事項

(1) 生育期間を通じ、「もち美人」の葉色は「ヒメノモチ」に比べかなり淡いので、目視のみの判断で追肥を行わないこと。

(2) 「もち美人」は「ヒメノモチ」に比べ耐倒伏性に優れるが、追肥は2kg/10aを上限とする。

## 4 成果の活用方法等

### (1) 適用地帯又は対象者等

「もち美人」の栽培地帯(矢巾、紫波以南、北上川流域の標高250m以下)

(2) 期待する活用効果 「もち美人」の安定生産

## 5 当該事項に係る試験研究課題 (804) 水稻糯品種の高品質安定生産技術の確立

## 6 参考資料・文献

(1) 平成14年度岩手県農業研究センター試験研究成果「水稻オリジナル品種「もち美人」の栽培法」

(2) 岩手県農業研究センター農産部水田作研究室平成13~15年度試験成績書(一部未定稿)

## 7 試験成績の概要（具体的なデータ）

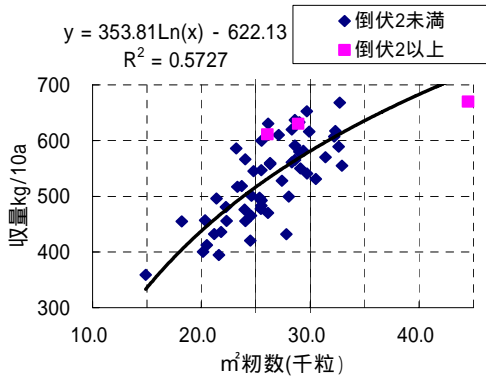


図1 m<sup>2</sup>粒数と収量（1.9mm玄米）の関係  
m<sup>2</sup>粒数25～30千粒で収量500～580kg/10aを概ね確保できる

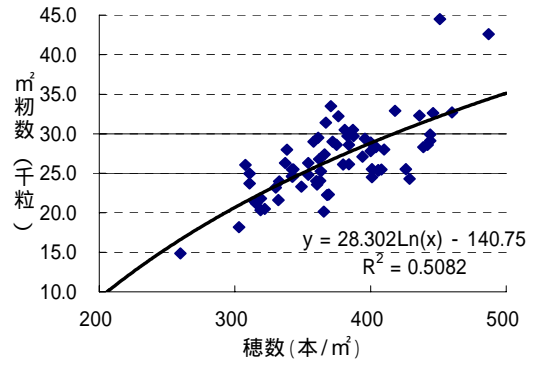


図2 穂数とm<sup>2</sup>粒数の関係  
m<sup>2</sup>粒数25～30千粒に対応する穂数は350～410本程度である

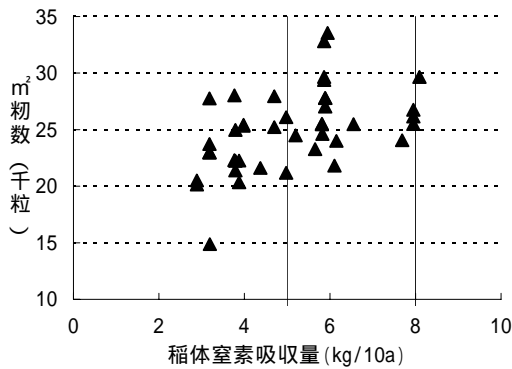


図3 幼穂形成期稲体窒素吸収量とm<sup>2</sup>粒数の関係  
幼穂形成期窒素吸収量5～8kg/10aで粒数25～30千粒を概ね確保できる

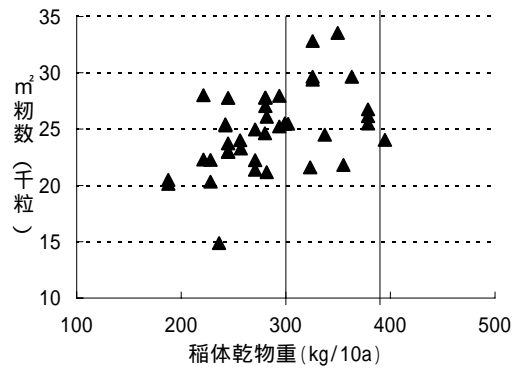


図4 幼穂形成期稲体乾物重とm<sup>2</sup>粒数の関係  
幼穂形成期乾物重300～390kg/10aで粒数25～30千粒を概ね確保できる

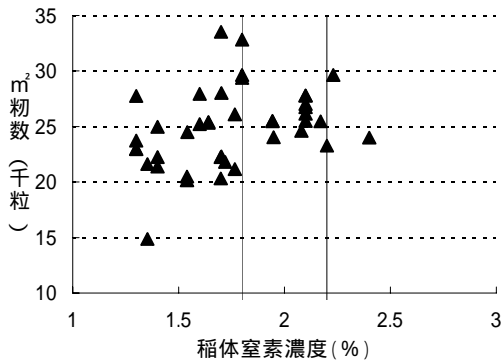


図5 幼穂形成期稲体窒素濃度とm<sup>2</sup>粒数の関係  
幼穂形成期稲体N1.8～2.2%でm<sup>2</sup>粒数25～30千粒を確保できる可能性が高い

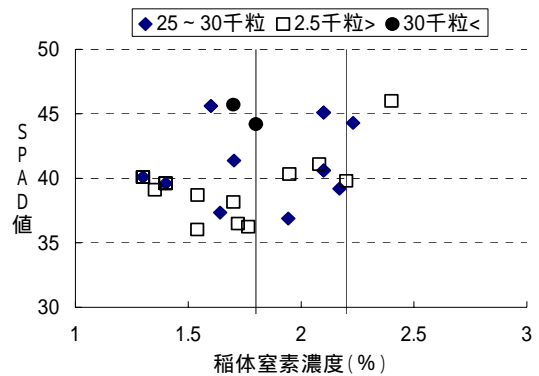


図6 幼穂形成期稲体窒素濃度とSPAD値の関係  
稲体N%1.8～2.2%の範囲で、粒数25～30千粒を確保できる可能性が高いのはSPAD値41～45である

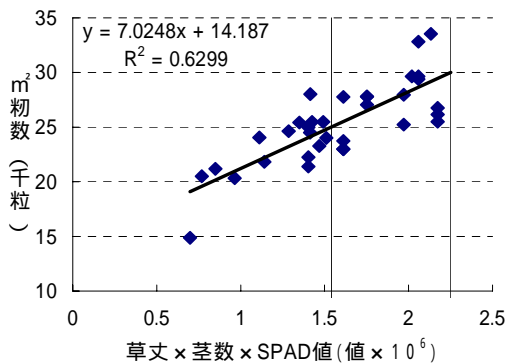


図7 幼穂形成期の簡易栄養診断値とm<sup>2</sup>粒数の関係  
簡易栄養診断値：草丈×茎数×SPAD値